

# がんと戦い生きる

## 一字一筆

静岡の今

「防災の日」で始まった9月は、房総半島を襲った台風15号による長期停電や家屋被害との戦いが続いているが、もう一つの「戦い」が続く月でもある。「がん征圧月間」である。民間最大のがん対策推進母体

である公益財団法人日本対がん協会を中心とした啓発活動がこの月に集中する。県のがん対策は、昨年3月に策定された「第3次静岡県がん対策推進計画」に基づいて、がんの早期発見につながる検診受診率や、成人の喫煙率を減らす「たばこ対策」など六つの数値目標を掲げて展開されている。

がんは、日本人の生涯で2人に1人かかる病気だが、早期発見や医療の進歩で「死の病」ではなくなつた。がんが死の病だった時代に、黒澤明監督の名画「生きる」がある。主人公の地方公務員は末期の胃がんと知った時、役所でたらいまわしにされていた小さな公園を命と引き換えに完成させる。

「生きる」には、忘れられないシーンがある。死の恐怖におびえながら懸命に生きようとする主人公が、オモチャ製造工場で働くかつての部下の女子工員に「生きるって、どうすればいいのか」と必死に尋ねる。女子工員はとっさに言う。「作るのよ、なにかを作るのよ」。鬼気迫る行動で住民に残した小さな公園は主人公の「生きた証し」だった。

早期発見で多くの患者ががんを克服できるようになった現在なら、黒澤監督は全く別の映画を作るだろう。

23日、県対がん協会(日本対がん協会県支部)は静岡市で今年度の「静岡県がん征圧大会」を開く。大会では県立静岡がんセンターの山口建総長が「がんの時代を生きる心構え」と題して講演する。

同協会は今年で創立50周年を迎えた。わずか数人のスタッフが、がんが「死の病」だった時代から、人の「生きた証し」の輝きを営々と紡いできた。

(前静岡県監査委員・富永久雄)



喫煙所に捨てられた吸い殻＝静岡市葵区、全日写連・山田康さん撮影